

川が育んだ妹背牛

—水とともに歩み、発展してきたまち—

青空が広がり、稲が青々と風に揺れる 8 月。北海道で3番目に面積の小さい町・妹背牛町には、石狩川や雨竜川、大鳳川をはじめ、多くの川が流れ、豊かな水辺と開放的な田園風景が広がっています。

広大な石狩平野の北部に位置する妹背牛町は、石狩川の恵みを受けながら、おいしい米の産地として発展してきました。その一方で、かつては水害に見舞われ、水と向き合いながら歩みを重ねてきた歴史があります。

今月の特集では、町の成り立ちや水害の歴史を振り返りながら、水とともに歩み、自然と調和してきた妹背牛町の姿をご紹介します。

茜橋から望む雨竜川

1 なぜ川が多いのか

妹背牛の地形と成り立ち



2 水害の歴史

洪水を乗り越えて



3 治水事業

暮らしを守る治水対策



4 水の恵み

おいしいお米づくり



1 なぜ妹背牛には川が多いのか



妹背牛町は、石狩平野の北部に位置する平坦な町です。この大地は、一級河川・石狩川と、その支流である雨竜川が長い年月をかけて上流から運んできた土砂が積み重なってできた「沖積平野」です。山がなく、高低差の少ない地形が広がっています。

この平坦な地形には、石狩川や雨竜川、大鳳川が流れ、さらに農業用水路が町内を巡ることで、水に囲まれた妹背牛ならではの風景が育まれてきました。また、川が運んだ肥沃な土壌と豊かな水は、おいしい妹背牛米を育てる大切な恵みとなっています。

現在の妹背牛は、自然が育んだ地形と、水を生かしながら暮らしを築いてきた先人たちの知恵と努力によって形づくられた町なのです。

2 幾度もの洪水を乗り越えて

主な水害の記録

昭和 30 年洪水	昭和 30 年（1955 年）7 月、幌加内町で日雨量 180mm を記録する大雨により、雨竜川が氾濫しました。流域の氾濫面積は約 4 万 6,500ha に及び、妹背牛町を含む広い範囲が浸水しました。
昭和 63 年洪水	昭和 63 年（1988 年）8 月、留萌地方南部から北空知地方を中心に記録的な豪雨が発生しました。石狩沼田で総雨量 425mm を観測。雨竜川や大鳳川では堤防からの越水や内水氾濫が相次ぎ、氾濫面積は約 6,500ha に達しました。



昭和 63 年洪水

写真：『雨竜川捷水路事業記念誌』
（北海道開発局発行）より

3 暮らしを守る治水事業



昭和 63 年の洪水を契機に、雨竜川・大鳳川流域では抜本的な治水対策が進められました。

雨竜川では、水位上昇の原因となっていた湾曲部をショートカットする「雨竜川捷水路」が整備されました。川の流れを約 2.1km 短縮することで、洪水時の水をより速く下流へ流し、水位の低下を図っています。

あわせて、大鳳川では雨竜川との合流点を約 4.6km 下流へ移す「大鳳川新水路」が整備されました。これにより、大鳳川の洪水時の水位が大きく低下し、雨竜川とあわせて流域全体の治水安全度が向上しました。

これら二つの事業によって、妹背牛町の浸水被害は大幅に軽減され、現在の安心・安全な暮らしにつながっています。

4 治水から、実りの未来へ

雨竜川捷水路や大鳳川新水路による治水対策とあわせて、排水機場や集水路の整備も進められました。これにより、洪水だけでなく、低平地にたまりやすい農地の水を速やかに排水できるようになり、安定した農業生産の基盤が築かれました。

その後は、国営農地再編整備事業と道営農地整備事業（パワーアップ事業）により区画整理や用排水路の整備が進み、大型農業機械による効率的な営農が可能となりました。豊かな水と肥沃な土壌、そして治水・排水施設と農業基盤の整備が重なり、現在の妹背牛のおいしい米づくりを支えています。



豊かな水に育まれ、
黄金色に輝く妹背牛町の田園